

断りを入れても長所は変わらない

— 談話焦点が人物の好ましくなさに及ぼす効果 —

○井関龍太^{1,2}・楠見 孝²

(¹日本学術振興会・²京都大学教育学研究科)

Key Words: 接続表現, 談話焦点, 印象形成

“～だが”と断りを入れることによって談話焦点を主節の内容に移動させると、文全体の印象が変化することがある。井関・菊地 (2007, 認知心大会) は、“和也は知ったかぶりをするが、欲がない”のような、架空の人物のパーソナリティ特性を述べる文を用いて、人物の好ましさの評価を求めた。その結果、ネガティブ特性では、逆接表現を用いた文で他の文よりも好ましさの評価が上がったが、ポジティブ特性では、逆接表現と順接表現の間に明瞭な違いは見られなかった。このパターンは、その後の実験においても再現されている (井関・菊地, 未発表)。このことの説明としては、2つの解釈が考えられる。1つは、好ましさに対する評価を求めた場合には、評価基準である好ましさに反するような情報 (ここでは、ネガティブ特性) に対する敏感さが増しており、そのために逆接表現の効果がポジティブ特性の場合よりも大きくなったというものである。もう1つは、印象形成事態で一般的に見られるネガティブバイアスが働いたことが考えられる (e.g., Baumeister et al., 2001)。すなわち、人物の印象を評価する場合には、そもそもネガティブ情報の影響力が強いため、ポジティブ特性よりも談話焦点の影響を受けやすかったというものである。これらの可能性を検証するため、本研究では、人物の特性を述べる文を読んだ後に、好ましさではなく、好ましくなさの評価を求める。ネガティブ特性とポジティブ特性での効果の違いが評価基準に反する情報への敏感さの上昇によるものであるとすれば、本研究では、ネガティブ特性では逆接表現の効果が見られず、ポジティブ特性で効果が見られるだろう。そうではなく、ネガティブバイアスによるものであるとすれば、先行実験と同様に、ネガティブ特性でのみ談話焦点の効果が見られるだろう。

方法

実験参加者: 調査会社に登録した大学生 62 名 (うち女性 27 名)。
要因計画: 2 (特性語: ポジティブ・ネガティブ) × 2 (接続法: 逆接・順接) × 2 (特性語の位置: 先行・後続) の被験者内計画。
材料: 井関・菊地 (2007) と同じ 56 組の文材料を用いた (Table 1 に例を示した)。これらの材料は、“Aは [特性語 1] だが, [特性語 2] だ。” (逆接), または、“Aは [特性語 1] で, [特性語 2] だ。” (順接) という形式であった。Aの部分には、男性か女性の名前を半数ずつ用いた (“和也”, “優子” など)。特性語の部分は、一方には常に中立語, 他方にはポジティブ語かネガティブ語を代入した。これらの特性語は、青木 (1971) に基づいて選んだ。先行条件では、非中立語を特性語 1, 中立語を特性語 2 の位置に割り当て、後続条件では各語を逆の位置に割り当てた。実験フォームでは 56 の文を提示し、各条件の文が等しい回数現れるようにした。56 組の材料の各条件への割り当ては参加者間でカウンターバランスした。結果として 8 種類のフォームを作成し、実験参加者に無作為に割り当てた。
手続き: 実験参加者は、PC 上で各文を読んで、文の述べる人物を “どのくらいいやな人物だと思うか” 判断して、5 段階で評価した (1 = “まったくいやでない” ~ 5 = “とてもいやだ”)。

結果と考察

各条件の平均評定値を Figure 1 に示した。2 (特性語) × 2 (接続法) × 2 (特性語の位置) の分散分析を行ったところ、3 要因の交互作用が有意であった ($F(1, 61) = 14.53, p < .001$; $F(1, 55) = 6.16, p = .02$)。

ネガティブ特性について、2 (接続法) × 2 (特性語の位置) の

分散分析を行ったところ、接続法 × 特性語の位置の交互作用が F_1 で有意であった ($F(1, 61) = 4.52, p = .04$; $F(1, 55) = 1.77, p = .19$)。先行-逆接条件と先行-順接条件では評定値は有意に異なり ($t(61) = 5.74, p < .001$; $t(55) = 3.49, p < .001$)、逆接表現によって順接表現よりも人物の好ましくなさが軽減されていた。また、先行-逆接条件と後続-逆接条件の差も有意であり ($t(61) = 4.33, p < .001$; $t(55) = 2.89, p = .005$)、この結果が逆接文の先行節の評価が変化したことによるものであることが確認された。

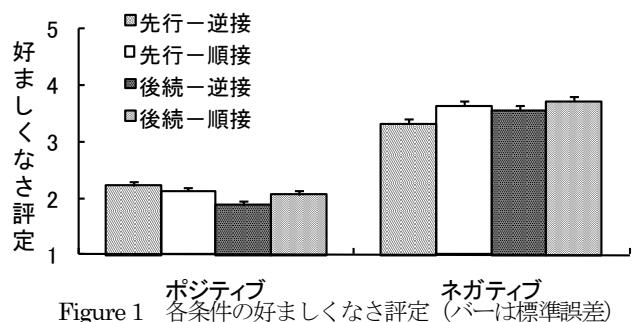
ポジティブ特性について同様の分析を行ったところ、接続法 × 特性語の位置の交互作用が有意であった ($F(1, 61) = 11.02, p = .002$; $F(1, 55) = 8.00, p = .01$)。ただし、この交互作用はネガティブ特性の場合とはやや異なるものであった。先行-逆接条件と後続-逆接条件の間には有意な差が見られ ($t(61) = 5.65, p < .001$; $t(55) = 4.53, p = .005$)、逆接文の先行節と後続節への焦点化が異なることが示唆された。しかし、先行-逆接条件と先行-順接条件の間の差は有意でなく ($t(61) = 1.63, p < .11$; $t(55) = 1.38, p = .17$)、ポジティブ特性では、逆接文における焦点化の効果は順接文における中立的な焦点の状態から評価を変化させるものではなかった。

以上のことから、ネガティブ特性とポジティブ特性での談話焦点の効果の違いは、評価基準の違いによるものではなく、ネガティブバイアスによるものであると考えられる。このことは、談話焦点が、課題要求に基づいて機能するのではなく、もともと顕著性の高い情報があるときにその情報とは逆方向に評価を変化させる働きを持つことを示唆している。

Table 1 使用した材料の例

【ポジティブ語】	
先行-逆接:	和也はがまん強いが、欲がない。
先行-順接:	和也はがまん強く、欲がない。
後続-逆接:	和也は欲がないが、がまん強い。
後続-順接:	和也は欲がなく、がまん強い。
【ネガティブ語】	
先行-逆接:	和也は知ったかぶりをするが、欲がない。
先行-順接:	和也は知ったかぶりをし、欲がない。
後続-逆接:	和也は欲がないが、知ったかぶりをする。
後続-順接:	和也は欲がなく、知ったかぶりをする。

※非中立語に下線を付した。実験フォームには下線はなかった。



※本研究の実施に際して、日本学術振興会 (特別研究員奨励費) の支援を受けました。

(ISEKI Ryuta and KUSUMI Takashi)

この原稿は日本認知心理学会の許諾を得て転載しています。出典は、日本認知心理学会第8回大会発表論文集 (p. 116, 2010 年) になります。